



**Data** 2021-155

監督・脚本：濱口竜介  
 出演：古川琴音／中島歩／玄理／洪川清彦／森郁月／甲斐翔真  
 ／占部房子／河井青葉

## 👁️👁️ みどころ

第74回カンヌ国際映画祭で脚本賞を受賞した『ドライブ・マイ・カー』は、村上春樹の原作（短編）だけでは不足として、もう2つの短編を追加、融合させて179分の長編に。

ところが、本作は逆に『偶然と想像』を統一タイトルにして、3つの短編で構成。それが第71回ベルリン国際映画祭で脚本賞受賞だから、恐れ入る。

本作鑑賞後の私の絶賛の声が届いたのか、濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』は、第79回ゴールデングローブ賞非英語映画賞も受賞！こりゃ、ひょっとしてアカデミー賞作品賞の可能性も・・・！？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■濱口竜介監督が快進撃！ベルリンで銀熊賞も！■□■

かつて、黒澤明監督は①1951年の第12回ヴェネチア国際映画祭では『羅生門』で金獅子賞を、②1954年の第15回ヴェネチア国際映画祭では『七人の侍』で銀獅子賞を、さらに③1980年の第33回カンヌ国際映画祭では『影武者』でバルムドール賞を受賞する等「世界のクロサワ」の名を恣にした。それとは異質だが、私の大好きな韓国のキム・ギドク監督もベルリン、カンヌ、ヴェネチアの三大映画祭を制覇している。他方、ここ数年の濱口竜介監督の快進撃は素晴らしく、彼らに比肩するものだ。その偉業は、①『スパイの妻』（20年）（『シネマ47』53頁）の脚本で第77回ヴェネチア国際映画祭の銀獅子賞、②『ドライブ・マイ・カー』（21年）（『シネマ49』12頁）で第74回カンヌ国際映画祭の脚本賞、そして、③『偶然と想像』（21年）で、第71回ベルリン国際映画祭の脚本賞、銀熊賞の受賞だ。

『ドライブ・マイ・カー』は、もともと村上春樹の短編小説集『女のいない男たち』に収められた短編のひとつだが、それだけでは不十分と考えた濱口監督が村上の許可を得て

同時に書かれた短編集である『シェエラザード』と『木野』を融合させて書いた脚本が素晴らしかった。そのため同作は179分の長尺になったが、本作は濱口監督初の短編集らしい。濱口監督の『ハッピーアワー』（15年）（『シネマ37』117頁）は317分の長尺だったが、なぜ彼は今、短編集に挑戦？

## ■□■「偶然」を統一テーマに、3つの短編を！■□■

キム・ギドク監督の映画は牛井の吉野家と同じく、「早い、安い、うまい」が特徴。彼のすべての作品でそれが貫かれている。他方、彼が選定するテーマは、①女高中生売春をテーマにした『サマリア』（04年）（『シネマ7』396頁）、②二重スパイをテーマにした『レッド・ファミリー』（13年）（『シネマ33』227頁）の脚本、そして③「メビウスの輪」をテーマにした問題作『メビウス』（13年）（『シネマ35』170頁）等幅広いうえ、その演出や音楽も1作ごとに異なるから、メチャ面白い。

それに対して、『シネマ49』で「ホン・サンス監督新旧3作」として取り上げた『逃げた女』（20年）（『シネマ49』341頁）、『カンウオンドのチカラ』（98年）（『シネマ49』346頁）、『オー！スジョン』（00年）（『シネマ49』350頁）のホン・サンス監督は、そのすべてを男女の恋愛をテーマにした会話劇に徹しているところがすごい。起用する女優も、次々と新人女優を発掘してきたキム・ギドク監督とは対照的に“ホン・サンス監督のミュージズ”と呼ばれているキム・ミニが圧倒的に多い。

このように考えてみると、「濱口メソッド」の提唱者たる濱口監督も、会話劇の傾向が強い。『ドライブ・マイ・カー』は村上春樹の原作を元にした脚本だから、一定の制約があっただろうが、たまたま妻を亡くした主人公・家福の職業が舞台演出家だったから、『シェエラザード』と『木野』の要素をうまく取り入れて見事な脚本を書くことができた。そんな濱口監督が、本作では「偶然」をテーマにして、全く異なる3つの物語（短編）の脚本書きに挑戦！

## ■□■偶然の反対は必然では？会話劇の面白さは？■□■

会話劇は舞台劇と通じるところがある。例えば、シェイクスピア劇の『ハムレット』や『リア王』を見ても、会話劇に慣れるまでが大変で、それはホン・サンス作品でも本作でも同じだ。「偶然」は日常的によく使われる言葉で、その反対語は「必然」。したがって、「偶然」をテーマに物語を作るのなら、「必然」との対比が普通では？例えば、織田信長が明智光秀に本能寺で殺されたのは偶然？それとも必然？毛利攻めで動けなかったはずの豊臣秀吉が主君の仇討ちとして明智光秀を討ち取ったのは偶然？それとも必然？

私はそんな風に思うのだが、3つの短編集からなる本作の統一タイトルは『偶然と想像』だから、アレレ・・・？これは一体ナニ？しかも濱口監督の「パンフレットに寄せて」によると、本作は全7作を予定している同名シリーズの第1弾として1～3話を収めたものらしい。なるほど、なるほど。それなら、私はとりわけ「想像」の部分に注目しながら、本作を鑑賞しよう。

2022（令和4）年1月25日記